

## 新渡戸稲造の神道観

著者	アントニウス プジョ
雑誌名	日本思想史研究
号	43
ページ	57-75
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/56509">http://hdl.handle.net/10097/56509</a>

## 新渡戸稲造の神道観

はじめに

明治・大正期に活躍した日本人キリスト教者で教育者としても知られている新渡戸稲造（一八六二—一九三三）をめぐる研究は少なくない。特に、新渡戸の思想における寛容性と普遍性は、しばしばキリスト教以外の宗教に対する彼の親和的態度として言及される。たとえば、近代日本人のキリスト教者の一人としての新渡戸が、自分の抱いた信仰と生まれ育った日本の国土と文化をどのように捉えていたのかについて、武田清子は、両者の関係を接木形の典型として論じている。その上で武田は、新渡戸的な寛容と接木型の信仰が、近代日本におけるリベリズム、ないしはデモクラシーの思想的背景をなすものとして非常に重要な意味があると指摘する。

しかしそうした指摘にも関わらず、新渡戸にとって日本上着の信仰である「神道」はいかなる意味をもっていたのかという点に着目した研究は、決して多くはない。新渡戸

## アントニウス・プジョ

稲造の神道観について岩瀬誠は、国際知識人として、新渡戸は彼特有の寛容的・普遍的（多元的）な視点から、神道とキリスト教の関係及び共通点を深く理解したと述べている。また、新渡戸稲造の英文著作を中心にその日本論・神道論を検討した佐藤一伯は、新渡戸に一貫する日本人の豊かな感受性の評価、生来の内なる善神の尊重、祖先崇拜の重視が、彼の内面・外面のいかなる背景に由来するものであるかを論じた。この二つの研究は新渡戸の神道観を考える上で重要なものであるが、いずれも新渡戸の完成期の思想について論じたものであり、彼がどのような思想的遍歴を経てそうした神道観に至ったかという点に関しては、十分に明らかにされていない。

神道と深くかわった伝統世界から身を起した新渡戸が、世界宗教としてのキリスト教に出会い、それを受容していく過程で、大きな精神的葛藤を経験したことは想像に

難くない。彼はその課題にいかにか立ち向かい、いかにか折り合いをつけていったのか。それは新渡戸の思想形成を考える上で、きわめて重要な視点になるにちがいない。

本論文は、以上の問題意識にもとづき、先行研究にほとんど触れられていない新渡戸稲造の神道観とその変遷について考察しようとするものである。新渡戸稲造の生まれ育った盛岡の家の精神的環境から始まり、東京での生活とその環境、札幌農学校から留学時代に至る生活ぶりとその環境の解明を通じて、彼が神道の信仰をどのように捉えていたのか、それとの関係のなかで、新たに出合ったキリスト教をどのように受入れていったのかを検討してみたい。

## 一 伝統信仰としての「神道」

新渡戸稲造の幼いころの神道経験の記録のほとんどは *Reminiscences of Childhood* (『幼き日の思い出』加藤武子訳、没後に出版、一九三四年)<sup>3)</sup> という著書から読み取ることができる。この記録は、彼が国連事務局長として勤めていたときにジュネーブで(一九二〇～一九二六年)書かれたものである。また、そのほかに『西洋の事情と思想』(一九三四年、『実業之日本社』より出版された)にも、幼き日々の思い出が多少語られている。

まず、新渡戸稲造の家族の宗教観および信仰のあり方について検討したい。新渡戸は自分の家族について、「私の家では儀式はほとんど行われなかった。現代風にいえば、祖父は唯物論者であり、父は懷疑論者で、母の信仰といえはお先祖を祭る(崇拜ではない)ことにあつたと思う。他の人々が、特定の宗教行事で飾り付けや祝いことをしても、私たちの家族は何もしなかった——いかにも残念なことである」と述べている<sup>4)</sup>。

このような幼年期の新渡戸の家庭環境は一般的ではないと思われる。なぜ他の家庭では宗教行事が行われていたのに、新渡戸のだけが行われなかったのか、その理由は明らかではない。しかし、当時の一般家庭と同様、新渡戸の家においても仏壇と神棚は具えられていたことはまちがいない。また、母が行っていたという「commemorating ancestor お先祖を祭る」といった信仰行為は、幼き新渡戸稲造も行ったと考えられる。

これに関連して、彼の姪が次のように語っている。

伯父様(新渡戸)が子供の頃一番楽しみにしておられたことは、家族の皆に、ほんのちよつとした御土産を持ってくださることでした。そして小遣い不足などでお土産が買えませんでした、彼はいつも火打ち石を手にとって、神棚に供えました<sup>5)</sup>。

こうした言葉から考えると、新渡戸が「私の家にはほとんど儀式が行われなかった」といったことは、一般家庭で季節ごとに行われた大きな行事に限られるのではないかと推測できる。幼い新渡戸が仏壇あるいは神棚に供え物を捧げることは、家の伝統および習慣として当たり前のように行っていたと考えられるのである。

新渡戸が若いときから神の存在を意識していたことも見逃すことはできない。彼はことあるごとに神に祈りをささげ、自分の願い事を叶えるために断食を行った。盛岡でのその習慣は東京に引越した後も続いた。一八七三年から翌年にかけての冬、たまたま一緒に上京した兄が病氣になった。盛岡にいたとき母の世話ばかりしてきた彼も、母がいないためこのときは相当困ったようにみえる。そこで彼は様々な治療に役立つ方法を考えた。その一つが、兄の病氣が癒えるまで、毎朝六時に家の近くにある神社の井戸で斎戒沐浴を行うことだった。

新渡戸は、幼少期に盛岡で母親とともに生活していたころにすでに断食行を実践し、上京した後も、水垢離によって神に祈願している。彼にとって、神に願い事をすることは幼少から慣れ親しんだ行為だった。唯物論者の祖父、懐疑論者の父の存在にも関わらず、彼は幼いころから、とくに母親を通して神の存在を抵抗なく受容していたのである。

## 二 伝統信仰からキリスト教へ

新渡戸は初め藩校共感塾で、次いで東京外国語学校の寮で暮らすため、養父大田の元を離れた。西洋の学問の環境に囲まれて生活するようになった新渡戸は、ほどなくして西洋の文化や思想の重要性を認識せざるをえない状況に立ち至った。

東京外国語学校在学中に、彼が書いた二ページほどの作文 *The Importance of Introducing Christianity into Japan* (日本にキリスト教を伝える重要性) は、英文学の先生によって選ばれ、フィラデルフィア万博に送られた。まだ一度も教会に入ったことがなく、牧師の話を聞いたことがない新渡戸は、学校で接する書物の中にある宗教的な(キリスト教)逸話や思想が含まれる物語を読むことによって、その心に強い印象を受けることになったと推測される。彼のキリスト教に対する興味は、このときから芽生え始めたのではないかと考えられる。それが前述の「キリスト教」をテーマに含む作文の執筆に結びつくことになったのである。

さらに、この頃、新渡戸の生涯にもう一つ大きな出来事があった。それは、一八七六年に明治天皇が東北を尋ねたとき、三本木に立ち寄り、その地の開拓者である新渡戸家

に勞いの言葉と下賜金を与えたことである。新渡戸家にとつて、この事件は無上の名誉であつたにちがいない。天皇の期待に応えるべく、若き新渡戸は政治家になる夢を捨てて、開拓者としての家の伝統を継承することを考えるようになった。彼が後に札幌農学校において勉学することを決心するに至る布石はこの事件にあつた。家の伝統を強く守ろうとする新渡戸にとつて、天皇の存在は何よりも大きなものだったのである。

この事件に関して、もうひとつ興味深い出来事があつた。それはこのとき天皇から与えられた下賜金の一部が、英語版の聖書を購入するために使われたことである。若い新渡戸は、「異国の信仰を私はまだ信じなかつた」と言いながら、西洋の学問に接近する手段として、キリスト教の聖典「聖書」を手に入れた。このことが、やがてキリスト教者として名をはせる新渡戸の人生の、決定的な転換点となるのである。

前述したように、新渡戸は明治天皇の意思を承け、開拓者という業を受け継ぐため、一八八七年七月に東京英語学校を退学し、同年九月第二期生として札幌農学校に入学した。この学校の独自の学風に、クラーク博士が、生徒たちに科学的な学問を教える一方で精神的な教養を身につけさせるため、キリスト教教育を導入した点がある。その実践

の一環として、一期生から「イエスを信ずる者の誓約」に署名し、キリスト教の教義に従つて生活することを基本方針としてきた。

農学の勉強に対する熱意に加え、すでに聖書への興味が心中に溢れている状況の中で、新渡戸はこうした学校の方針を抵抗なく受入れた。彼は「イエスを信ずる者の誓約」に署名し、キリスト教者として洗礼を受けた。このとき彼がいかなる動機によつて署名したのかは定かではないが、一期生の太田正健の次のような言葉は注目される。

ところで、第二期生としてやつて来た太田（新渡戸）稲造は、在京中に早くもキリスト教的信仰が芽生えていたものと見えて、札幌へ来たり折には立派な英語聖書を携えていた。（中略）それかあらぬかキリスト教に対しては好感を示さなかつた二期生の中で、太田はキリスト教の思潮に共鳴していたものと見えて、率先して「イエスを信ずる者の誓約」に署名した。それをきっかけに二、三ヶ月を得ない間に十八名中の十五名までが（中略）誓約書に署名した。

率先して署名した新渡戸は、一期生の先輩たち、特にクラークから直接教育指導を直接受け、自身もキリスト教者となった太田正健から注目されていた。他方、東京英語学校以来の同期生でもある内村鑑三は、この時点でキリスト教

に対して強い違和感を抱いており、激しい抵抗を示していたと大島は記している。

内村と新渡戸は同じく武家の子として育てられたが、内村は長男で新渡戸は次男である。この違いも影響しているであろうか、日本人が守るべき伝統文化・伝統信仰という思考が内村には非常に強くみられる。他方、幼いころからさまざまなことに興味関心を示した新渡戸は、東京英語学校で親しんでいた聖書の物語についても、新しい学問の対象として抵抗なく受け入れたのではなからうか。

キリスト教に対する新渡戸のまじめな態度は、周辺の人々たちからすぐに注目を浴びることとなる。当時の新渡戸の性格とキリスト教への傾倒について、後に内村鑑三は次のように述べている。

パウロ〔新渡戸〕は『学者』であった。彼はしばしば神経痛に悩んだ、また近眼であった。彼はすべての事を疑うことができ、新しい疑問を製造することができる、そして何事も自分がそれを受取ることのできる前に吟味し証明しなければならなかった。彼は自分の別名をトマスとつけるべきであった。しかし彼の眼鏡といかにも気取った学者的風采とにかかわらず、彼は心に偽りのない少年であった、そして安息日の朝の集まりでは摂理と予定について陰鬱複雑な懷疑をもって

『教会』の熱心を冷却させた後に、その日の午後の桜花の下で野遊び (*fete champetre*) には仲間といっしょに参加することができた。<sup>(10)</sup>

内村は若き新渡戸の人物像を、「学者」、「心に偽りのない少年」などという言葉でもって表現している。札幌農学校において学問の勉強とキリスト教の勉強で多忙な毎日を通り過ぎようになった彼は、このときから本格的な自身の思想形成を開始するのである。

### 三 日本の伝統信仰への懷疑

新渡戸稲造は札幌農学校を卒業後、二年ほど開拓使としての任務を果たした。その後、再び上京し、東京帝国大学に入学した。しかし、大学の学風に対して不満を感じて退学し、一八八四年八月（二三歳）私費での米國留学を選択した。このような不安定な生活の中で、一人の留学生として彼が、宗教に対しても周辺環境に対してもさまざまな疑問を抱くことは自然で、むしろそれは彼自身の人生の成長の証と考えられる。

また、在学中、自分の心を癒すことができるような答えを探すため、様々な教会の礼拝に出席してみたが、現地の教会の様子に対して不満を抱いた。これについて彼は次の

ように述べている。

渡米後、怠らず各派の教会に行つてみたが、(中略) 宗教の機関が余りに立派で、唯奢と装飾が眼に付き過ぎて、腰掛ける椅子も贅沢、聴聞する信徒の衣裳は所謂日曜服、合奏する人々は唯声の好いのを誇り顔、牧師は耳朶を喜ばず雄弁の蓄音機、僻み根性かは知らんが、何んだか新約全書に載せてある宗教とは別物のやうな感が起つた。

新渡戸は、どこにも安住の場所を見出せなかつたのである。しかし、このような不満は、アメリカにおいて、ジョージ・フォックスが設立したキリスト教のクエーカー派と出会うことで解消に向かう。彼がそれまで探し求めていた答えに辿り着いたかのように、新渡戸は急速にこの派に引かれていった。クエーカー派の教会の様子について、彼は次のように述べている。

其建築と云ひ、内の大裁と云ひ、設備装飾——否、寧ろ無装飾——悉く十七世紀の絵でみたやう。中には若い婦人も許多居たが、華美な着物は一枚も見えない、帽子に花を着けた者等は更けない、ソレに説教する演壇もない、賛美歌もない、三百人許りの信徒が、座禪を組むが如くに唯端然として黙座し、折に聖霊に感じた人あれば、誰でも立つて、二三分、長いので

二十分も感話を述べる。斯くする事一時間半位にして、此静肅なる会合は解散した。僕は友徒の事は兼て書物で読んで居て、此宗教の中から剛胆不拔な者が許多現はれた事も承知してい居た、初めて会堂に臨んで成程此養成法なら風変りな人物が出る筈だと思つた。其後も屢々会堂に行き、又其宗派の人にも交はつたが、感服する事が多い。

「無装飾会堂」、「静肅なる会合」、「聖霊に感じて感話を述べる」——このような嚴肅な礼拝の状況が深く彼の心を捉えた。純粹で、落ち着いて、聖霊によつて心が導かれる——新渡戸の心の波長は、クエーカー派のそれに同調したのである。新渡戸は、友人の宮部金吾宛に次のように書いています。「僕は日曜日ごとに、『クエーカーの集会』に出席しています。あの單純で、真面目なところが非常に気に入りました。」(一八八五年十一月十三日)<sup>(17)</sup>翌年の十二月、彼はボルティモア友会(クエーカー派)会員として承認された。

クエーカー主義の特色は、すべての人間に神から照射される「内なる光」の存在を信じ、これを信仰の原点として受け入れるところにあつた。各自の心に直接に働く「内なる光」は、キリストによる救いを可能とする靈的な働きであり、教會的伝統や聖書にさえも優先して信仰成立の根拠

とされるものだった。

こうして信仰生活が落ち着きをみせるにいたった新渡戸は、母国の伝統文化、及び日本人の信仰についてのどのように考えるようになったのであろうか。留学以前と変化はあるのであろうか。次に、この問題を検討したい。

米国学中、彼は母国の文化あるいは思想について多くの米国の人々に語る機会が度々あった。米国人のジャーナリスト、ジョン・コリンは、ある講演会での新渡戸の話を以下のように纏めている。

日本には宗教体系は三つある——仏教すなわちゴウタマの体系は下層階級に人気があり、神道の神々の数は八百万にものぼり、儒教は倫理形式で、その国ではわずかしかられていない。その神道の神殿は堂々たる構えで、金銭、米、餅などの供物は数多いが、仏僧はその教えていることを信じていないし、礼拝の堂時には商売人と買物客で混雑する。

米国学中の新渡戸は、友徒会の人々に対して、明治維新前後の日本人は宗教の区別や内容に関してほとんど無関心であったと指摘している。また日本の宗教事情について、仏教という宗教はあっても僧侶の話を信じている人はあまりいないこと、儒教に関しては日本人がその倫理面しか捉えていないことを指摘する。そして神道については、その

特徴として供物の多さ、礼拝施設内での商業活動を挙げている。仲見世に象徴されるような境内における商業活動は、日本においては決して珍しい光景ではないが、「わたしの父の家を商売の家としてはならない」(ヨハネ二十六)という聖書の言葉に照らしたとき、それは新渡戸にとっても好ましいものではなかったに違いない。

一八九一年にジョンズ・ホプキンス大学で出版された *The Intercourse between the United States and Japan* (『日米関係史』、日本語訳・松下菊人、一九八五年)の中にも、次のような文書がある。

日本人のキリスト教に対する敵意もまた歴史的かつ政治的なものであったし、それゆえその感情は、武士階級の間で最も厳しかった。それというのも、彼らにとつて仏教は、いわば空文であったし、神道は先祖の遺産としてのみ尊敬に値したからであった。

このように、米国学中新渡戸稲造は、母国の伝統信仰(仏教・儒教・神道含め)を語る際、キリスト教と比較して、かなり批判的な口調をみせるようになる。こうした態度を取る背景として、友徒会の人々に、新渡戸らが札幌で建てた札幌独立教会への支援を求めるため、日本の伝統宗教を批判的に描写することによって、彼らの関心を引こうとした可能性も考えられる。



いずれにせよ、この時期の新渡戸は、クエーカー派と出会うことによつてキリスト教の思想をさらに深く理解するようになる反面、幼いころからその中で生きていた伝統信仰を批判するに至る。新渡戸の神道を中心とする日本の伝統宗教観は、ここにおいて大きな転換を見せるのである。

#### 四 神道観の展開

##### (一) 帰国後の活動

一八九一年一月、友徒会で知り合つた米国人のメリー・エルキントンと結婚して、二人は帰国した。同年の三月、札幌農学校の教授として勤務した新渡戸は、学校関係の仕事とキリスト教（特にクエーカー派）の伝道活動で多忙な毎日を過ごした。しかし、数年間の間に、長男を亡くしたり、体調不良を起こしたりなど、新渡戸夫妻は様々な苦難に直面した。一八九八年には、病氣のため新渡戸は教授を辞任することになった。病氣療養中の新渡戸は、落ち着いて過ごすことのできる時間が増えたためか、この時期、その生涯でもっともインパクトの大きい作品を仕上げている。それは、日本で始めての農業に関する貴重な論文である『農業本論』（一八九八年）と米国で療養中に書かれた英文の日本人論 *Bushido: The Soul of Japan*（『武士道

日本の魂——日本思想の解明、一九〇〇年、日本語訳：矢内原忠雄、一九三八年）である。この時期から、新渡戸における日本文化論、特に神道についての論評が、本格的に開始される。

まず、亡くなった最愛の母のためにささげた『農業本論』の中にみえる、神道および伝統信仰についてのいくつかのコメントに注目してみたい。神道における農業の重要性を強調しながら、新渡戸は、「神道は天地の作用と、祖先の記念とを尊敬するを以て旨とするものなれば、農桑に於ける関係の最も親しきは、理の見易き所なりとす」と述べている。新渡戸は、様々な祭りで用いられている農産物は、日本の伝統信仰としての神道にとつてとても重要であると述べている。

ここでは、新渡戸は神道の根幹として、「天地の作用」と「祖先の記念」の二つをあげている。このような定義は、あくまでも日本人の伝統信仰という枠のなかで神道を捉えていることを示すものである。本書は、日本の農学の中で非常に貴重な著作であり、新渡戸稲造の生涯でも重要な意義を持つ物である。前述したように、最愛の母にささげると書いてある他に、彼の生涯の中で農学を学ぶきっかけとなった明治天皇との関係を告白しているのである。<sup>(1)</sup>

神道に関する新渡戸稲造の考え方および理解は、

*Bushido: The Soul of Japan* (『武士道』 日本の魂——日本思想の解明、一九〇〇年)の中でより詳しく述べられている。西洋人を対象として自国の伝統文化及び思想を解説したこの名著では、新渡戸は「武士道の淵源」の一つである神道について次のようにまとめている。

① 神道は他の宗教の教義に欠けている教義を豊かに供給した (三六頁)。

② 神道の教義には、主君への忠誠、祖先への尊敬、親への孝行 (これらは後に「忠義」と呼ばれ)、自然崇拜 (後に「愛国心」に変化する) という日本国民の感情生活の二つの支配的特色を看守しうる (三七頁)。

③ 神道には、原罪の教義はなく、人の心は本来善である神のように清浄であると主張している (三六頁)。新渡戸はさらに、天皇は天の代表者 (三七頁) であると述べている。

新渡戸はここで、仏教の教義に欠けているものを神道が「満たしている」こと、キリスト教の教義と違って神道には「原罪」という教義がなく、人間は生まれながら清浄な心を持っているとされることを説く。さらに、倫理性を重んずる儒教以上に、神道の教義には、祖先への尊敬と主君への忠誠、国士への愛と親への孝行といった様々な道徳も

含まれているとする。このような豊かな教えが含まれている神道こそが、日本人が昔から持っている道徳観を支えてきたと新渡戸は主張しようとしたのではなからうか。最後に、新渡戸は自分がキリスト教者であることを明言しつつ、この武士道に含まれている教義に、キリスト教の「愛」の理念を供給したらより素晴らしい道徳概念になるのではないか、と述べるのである。

新渡戸は、神道を語る際、しばしば他の宗教および信仰を比較しながらその特色を論じている。たとえば、「農業本論」の「第七章 農業と風俗人情」「宗教は農を重んず」の中では、世界最高の宗教マツダーム (Mazdaism の宗教)、エチオピアの宗教、仏教、ユダヤ教などの各宗教と農業との深い関係と比較しながら、日本の伝統信仰「神道」の様々な祭りと農業の密接な関連を述べている。

また *Bushido: the Soul of Japan* (一九〇〇年) 「Chapter II Sources of Bushido 第二章 武士道の淵源」では、神道の教義を述べる際、神社においてある鏡の意味を説明するにあたって、ギリシャの神話 (デルフィの神託) にある「汝自身を知れ」という譬えを用いている。このように、新渡戸は神道に含まれている教義が、他の国々の信仰と比較対象可能なものであることを強調し、努めて神道を広いコンテクストのなかで論じようとした。また、このころの新渡

戸稲造の神道論の特色として、自分が日本人キリスト教徒という自覚に立つて、日本の伝統文化および信仰を論じること、神道に対する新たに積極的な意味付けがなされたことを指摘できる。

新渡戸稲造は *Bushido: the Soul of Japan* (一九〇〇年) が出版されてからおよそ十年間、神道を本格的に論じることとはなかったが、一九一二年米國に出版された *The Japanese Nation: its Land, its People and its Life* (『日本国民、その国土・民衆・生活』、一九一二年、日本語訳・佐藤全弘、一九八五年) には、彼の神道論の展開を見ることが出来る。本書は、五一歳の新渡戸稲造が一九一一年から一九一二年にかけて、日米初の交換教授として米國を訪れ、各地の大学で一六六回に及ぶ講演を行ったその記録(講演録)である。新渡戸稲造の最初の包括的な日本紹介の試みであり、東西相互の理解の必要性が提唱されている。日本の地理・歴史・国民性・宗教・道徳・教育・経済・植民政策・日米関係を、十二章に構成した著書である。神道論は、「第五章 宗教信念」で論じられている。

神道を論じるにあたって、新渡戸は彼独自の宗教の定義を行っている。

この世の生涯の彼方における自己の存在について人の信ずるところは、未来における存在でも過去における

存在でも、それがその人の信仰をなす。そして、彼が自分の信仰の糸として行うこと——とくに礼拝行為において——がその人の宗教を構成する。<sup>6)</sup>

ここで端的に述べられているように、新渡戸における宗教とは、この世に生きている人間の過去・未来の实在に対する信念と、「信仰の糸」としての礼拝の実践からなる。このような定義にもとづき、新渡戸は「日本人は生まれつききわめて宗教的な民族である」と主張するのである。

また新渡戸は、神道について次のようにまとめている。

①道徳的な教義がかけられている神道には、仏教と儒教から沢山補充されること。(『武士道』三六頁、『日本国民』一三四頁)

②神道の教義には、祖先崇拜があり後に「忠義」になり、自然崇拜は後に「愛国心」になること。(『武士道』三七頁、『日本国民』一三三頁)

③神道には「原罪」の教義なく、道徳的な指令要点「まこと」により、心も体も清くすること。(『武士道』三六頁、『日本国民』一二二頁)

④神道の重要性は二点あり、それは「日本固有」と「皇室の宗教」であること。(『日本国民』一一八—一九頁)

⑤神道の弱点は「現実」と「真実」の区別がみられない

いこと。(『日本国民』一三一頁)

以上のまとめからわかるように、新渡戸稲造の *Bushido* (『武士道』一九〇〇年) と *The Japanese Nation* (『日本国民』一九二二年) における神道論は、内容的にはほぼ同じものである。ただし、後者の神道論は、より包括的に論じたものということができる。新渡戸は *Bushido* のなかで、他宗教(仏教)が欠けているものを神道が満たしているという表現を用いたが、*The Japanese Nation* では、神道にないもの(道徳)を他のところ(仏教・儒教)から求めるといふ言い方をしている。前者と比べると、後者では、新渡戸が読者に対してかなり気をつかっている様子が感じられる。既に述べたように、後者は、新渡戸が交換教授として米国の大学で行った講演の記録だった。

もう一つ注目したいことは、天皇の問題である。

*Bushido* では天皇について「天の代表者」・「国民的統一の創造者」であると表現したが、*The Japanese Nation* では、神道は皇室(「天皇」を使わず)の宗教であり、「宮廷」の主な儀式・祭式のすべてに流れている」と述べている。また、新渡戸は「皇室」に関連して、古代から統治することと礼拝することは、語源的には同意語(マツリゴト)(二一九頁)であると説明している。それ以上、天皇については述べられてはいない。

以上、明治期における新渡戸稲造の神道観を考察した。次節では、大正・昭和期の新渡戸稲造における神道観をみていきたい。

## (二) 大正から昭和期

大正から昭和初期は、新渡戸稲造の生涯にとって大変大事な時期である。教育者並びに外交官としての活躍はこの時期ピークを迎え、国内外の講演会や会議などで話す機会が多くなった。一九一一年(明治四四年)初代日米交換教授を手始めに、帰国後は東京帝国大学の教授専任(一九一三年)、東京女子大学初代学長(一九一八年)、国連事務局次長(一九二〇～二六年)、貴族院議員(一九二六年)、太平洋問題調査会理事長(一九二九年)などの仕事を歴任した。その他に、東南アジアや台湾や欧米などへも出張した。講演資料や著書や随筆なども数多く出版している。

この時期、考察対象の著作としては、『西洋の思想と事情』(一九三四年)・*Japan: Some Phases of her Problems and Development* (『日本——その問題と発展の諸局面』一九三一年、日本語訳：佐藤全弘、一九八〇年)・*Lectures on Japan: An Outline of the Development of the Japanese People and Their Culture* (『日本文化の講義——

日本国民とその文化の發達に関する概説、一九三二年米國にて書かれ、一九三六年に出版、日本語訳・松下菊人一九八五年）などがある。

『西洋の思想と事情』（一九三四年）は、新渡戸が一九二八年春頃に行った、早稲田大学における連続講義資料から構成された著書である。本書では、福沢諭吉が書いた『西洋の事情』（一八七二年）を手本にしながら、自分が経験した西洋の世界と日本人のいる東洋の世界、両者の文化をどのように組み合わせればいいのかを論じたものである。神道に関する議論が、「第四章共存觀念と独立心」のなかの「神道は共存宗教」の節にある。

本書ではこれまでの著書と異なり、新渡戸は、東洋の代表としての神道と西洋を代表するキリスト教を、その性格・民族性について徹底的に比較したものである。新渡戸は、神道をシャーマニズムと指摘し、「宗教としても、これは個人的な宗教ではなく、矢張りコンミュナル・マジック」であると定義した。コンミュナル・マジックとしての神道について、彼は以下のように述べている。

吾々大和民族の殆ど唯一の、エモーショナル・ライフ、とでもいふべきものは、神道によつて来るものである。この神道そのものが、果たしてコンミュナル・カルトであつたならば、前述の自己などに重きをおかず、

エキストロヴァートの方に力を注ぐのは不思議ではない。そして吾々はエキストロヴァートのよいところを發達させると同時に、他面、今まで怠つてゐたイントロヴァートの強味をも、大いに吸収する必要があるのではあるまいか。

このように、新渡戸は、キリスト教が「パーソナル・レリジョン」であり、「個人魂」・「ラブ」（愛）の尊重など「イントロヴァーション」（内向性）という特徴を指摘できるのに対し、「共存共栄的な生活」を尊ぶ神道は「コンミュナル・マジック（カルト）」、「祭礼的なもの、リチュアル」な要素が強いと述べる（五八七～六〇四頁）。また、彼は「コンミュナル道徳觀念」である日本人の道徳觀念によつて、独立心が貧しい反面依頼心が強いため、家族制度の發達をみたと指摘する。他方、「個人主義」を重視する西洋人は、「独立心」が強いので、結論として新渡戸は、「完全な人間にならうとするには、すべてこの両方の長所を採らなくてはなるまい」とする（六〇六頁）。このように本書における神道論は、神道の教義を重視するものではなく、キリスト教社会と比較しつつ、神道および日本の国民性の特徴を論じたものだった。

*Japan: Some Phases of her Problems and Development*

（「日本——その問題と發展の諸局面」ロンドン、一九三一

年・七〇歳）は、日本の現状への批判的な視点を持ちながら地理・歴史・明治以降の近代・政治・労働・思想生活を取り上げていた著書である。神道については、「第七章 日本人の思想生活」の中で触れられている。内容的には、*The Japanese Nation*（『日本国民』、一九一二年・五一歳）とほとんど変わりが無いが、日本の政治情勢の変化によって新たに議論にも加えたものも随所に見られる。以下の文章には、この本における新渡戸の神道論が端的にまとめられている。

信仰体系として神道は、近代科学の発達と歩調を合わせることがほとんどできないであろう。その信条の多くは——その名に値するとすれば——筋道が立っていないことが明らかとなる。哲学的にも、歴史的にも、倫理的にも、神道はおよそ外来の信仰——仏教とキリスト教——匹敵することはできないであろう。神道の力と神道の生命そのものが、その民族的、厳密に国民的、民族主義的性格によるものである。なんらかの形で神道は、その生まれついた国民の知的革命のあとにも生き残るであろう。それも神道が知性に支えられておらず、情緒に支えられているからであるが、このことは、神道が他のどの徳にもまして教え込んできた忠君愛國で、一番よく証明される。神道を要約して、日本民族

の情緒的要素の全体とよんでよからう。<sup>(2)</sup>

新渡戸はまた、一八八九年に発布した大日本帝国憲法の中に書かれてある「神道は宗教ではなくて、皇祖に対する崇敬と、国民の英雄を記念する祭祀の行事にすぎない」という神道の非宗教性を規定する条項に対して、新渡戸は「それゆえ神道は二重の仕方で扱われている——“国家”の儀式として、また民間信仰の一形態として——そして後者の分類においてのみ、神道は宗教と考えられている」と述べている。<sup>(3)</sup>このように、新渡戸が大日本帝国憲法の内容と同じように、神道は「皇室の宗教」・「民間の信仰」というレベルでは宗教であるが、国家の儀式というレベルでは宗教とは認められないと主張する。

当時、日本政府が皇室は国民の信仰の中心であるとしていることに對し、西洋人たちが非難の声が起こっていた。右の新渡戸の言葉は、そうした批判を意識したものの捉えることができるであろう。新渡戸はさらに、「人間本性は生まれながら善である」という教えが、世界に対して神道が貢献できる有意義な思想の一つであると主張した。

*Lectures on Japan: An Outline of the Development of the Japanese People and Their Culture*（『日本文化の講義——日本国民とその文化の発達に関する概説』、一九三六年・新渡戸の死後東京で出版）は、一九三三年十月から

十二月にかけて行われた、米国カリフォルニア州の大学での約二〇回の講義の資料として、新渡戸の死後メリー夫人の手で整理し出版された著書である。そこにみられる新渡戸の神道論は固定化され、*The Japanese Nation* (『日本国民』、一九一二年)・*Japan* (『日本』、一九三一年)とほぼ同じ内容にとどまっている。しかし、興味深い点が一つある。それは天皇に関する記述である。*Japan* (『日本』、一九三一年)と *Lectures on Japan* (『日本文化講義』、一九三六年)では、「神道は皇室の宗教」として皇室と神道の緊密な結びつきが主張されたが、他方で *The Japanese Nation* (『日本国民』、一九一二年)に述べられていたような「天皇」は「天の代表者」・「国民の統一象徴」といった表現は消えてしまっている。代わって、皇室も国民も同じように神道を儀式として行っていることが強調される。これは新渡戸稲造が日本人の学者の代表であることを意識しながら、学術的なアプローチとして、天皇の存在を米国の学者たちに理解してもらうためになされた一つの努力ではないかと考えられるのである。

### (三) 神道の再発見

人は思い出によって自分の生涯の有意義さを再び意識

し、新たな一歩も踏み出すことができると考えられる。新渡戸稲造も自分の長い道のりの人生をある頂点に辿り着き、自分の生涯を再び見るたびに新たな発見を掘り出すことができた。新渡戸晩年における神道論を考察するために、一九二三年頃に書き始めた *Reminiscences of Childhood* (『幼き日の思い出』、一九三四年、日本語訳：加藤武子)と一九二八年春頃、早稲田大学で連続講義資料として書かれた『西洋の事情と思想』(一九三四年)を検討したい。

先にも論及した *Reminiscences of Childhood* (『幼き日の思い出』)は、アメリカのある出版社の依頼を受けるために書かれた書斎だったが、依頼主の出版社は倒産するため、この書斎は推敲を経たずそのまま筐底にしまわれた。新渡戸が客死後、メリ婦人の意志で東京で出版された。本書の内容は、新渡戸の少年時代の個人的体験を辿りながら、明治初期の様々な時代の変化と自分との関わりを記したものである。

その神道に関する記述は *The Japanese Nation* (『日本国民』、一九一二年)のそれとほとんど変わらないが、いくつか注目すべき点がある。一つは、新渡戸が幼少時代の家を回顧して、自分の「家では宗教的な儀式がほとんど行われなかった」と述べた後、「母の信仰といえば、御先祖を祭る(崇拜ではない)ことにあつたと思う」と記している

ことである。なぜ新渡戸はわざわざ「崇拜ではない」と書き加えたのであろうか。*The Japanese Nation*（『日本国民』一九二二年）では、神道は「日本の特有」の信仰および宗教であると述べる一方で、神道の重要な教義の一つを「祖先崇拜」としている。当時の日本の一般家庭では「祖先崇拜」が一つの伝統として一般に行われていたが、なぜ新渡戸は自分の母の行為を祖先「worshipping, 崇拜」ではなく、「commemorating, 祭る」という言葉で表現したのか。ひとつの可能性としては、新渡戸がアメリカ人に対して、自分の家族が積極的な神道の信仰を有していたという誤解を与える事態を避けようとしたことが考えられる。

若いときの自分にとって、時折聞く叔父の話、母からたびたび来る書簡、講釈師の物語など自分の精神的教養のすべての源泉は神主の説教にあつた、と新渡戸は述べている。神主の説教とはなんだつたのであろうか。以下の引用文はその内容を示するものである。

人間は誰しも皆自分自身の光であつて、また、そうあらしめる能力もあるのだという教義に、私はとくに啓発された。さらに、もし自分自身の光を恥ずかしめぬよう暮らせば、何事も自在に出来る——他人に何んと言われようとも。この教えは心強いものであつた。

これに関連して、『西洋の事情と思想』（一九三四年）に

記載された、神道に関する一つのエピソードに注目する。

明治維新の頃に神道が盛んに行はれた。各村に教導職といふものをおいて——いはゞ基督教でいふ牧師、仏教で僧侶といったものである——盛んに神道を鼓吹したものである。私が八つ九つ時、神道熱の極く盛んな頃に遭遇したから、いくぶんその方は心得てもゐるし、私自身では、神道のために少なからぬ感化を受けてゐる。その時分、神道の主として教へたところは、「祈らずとも神や守らん」といふことで、神は銘々の心に在るといふのである。（中略）明治の初めには、その意味における神道を盛んに鼓吹したものである。これならば、吾々も頗る同感である。社に行つて神おますのではない。銘々の心に神は宿つてゐる。

一八七〇年二月三日に、明治新政府は神道を国教として定めるために大教宣布を發布し、神祇官内に宣教師が設置された。しかし、その一年後の一八七一年八月には諸外国からの政教一致という非難を受けて、政府が神祇官を廃止、その代わりに神祇省を設置した。それをまた廃止し、代わつて一八七二年三月には宗教省を設置した。新渡戸はこうした明治初期の神道復興運動の状況下で耳にした、「人間は誰しも皆自分自身の光」という教えに、後に米國留学中で出会つたクエーカー派の教義である、人間の心に宿る「内



なる光」という思想との共通性を見出したのである。

新渡戸は神主の説教によつて、自身の生き方や考え方などに於いて自覚を有するようになった。「私は自分の中に動機を求めるようになり始めた」のである。ただし、神主の説教によつて幼い新渡戸の心が「啓発された」ことは事実であるが、「私は感情に動かされやすかつたが、決して狂信的ではなかつた」と述べる通り、信仰としての神道の道に踏み込むことはなかつた。その後、学校の寮に入つたため、新渡戸は神社へ行くことはできなくなつたが、この神主の教えを忘れることはなかつた。

東京外国語学校では、新渡戸は英語の勉強のためさまざまな物語を読むことを通じてキリスト教に対する興味が芽生えた。これについて彼は、「宗教的思想で一ぱいな書物に述べられている物語は、私の柔軟な心に強い印象を与えた」と述べている。しかし、この頃の彼はキリスト教を、宗教として日本人の精神的な面を導くものとして重要と考へるのではなく、「祖国の人々を有能にし、世界の国々の中の偉大な力となるようにするにはキリスト教の導入が不可欠である」と、その有用性を功利主義的な面に求めた。

晩年になつた新渡戸は、幼少期の記憶を辿つて神道を再発見した。その神道の核心となる教えは、「人間は誰しも皆自分自身の光」、「神は銘々の心に在る」というものだっ

た。それは円熟したキリスト教の信仰世界を築き上げた新渡戸にとつて、それはクエーカー派の教えとまさに一致するものだった。かつて在米時代に一度は厳しい批判の眼差しを向けた神道に、新渡戸は独自の視線からその魅力を見出すに至つたのである。

### おわりに

キリスト教信者であるが、一人の日本人として新渡戸稲造は、生涯において神道のあり方は欠かせないものと考えていた。新渡戸にとつて、神道は、家の伝統及び習慣として幼いころから慣れ親しんできたものだった。そして、青年になり、西洋文明を身につける中で、自然に出会つたキリスト教に対して、その魅力に魅せられた彼は、後にキリスト教の洗礼を受けた。しかし、ここで注目すべき点は、神道は単なる伝統文化として守るべきものであるが、キリスト教の信者になつても新渡戸は神道を完全に捨てなかつた点である。米留學中、一時神道に対して懷疑を抱いたが、後に、キリスト教（プロテスタント）クエーカー派の「内なる光」という教義に出会うことによつて、神道を含め、どの宗教でも、人間の心に宿り、人間の歩む道を照らしてくれるような「光」があるという共通するようなもの

があることを彼は初めて理解した。それが、新渡戸の寛容性と普遍性の重視を支える大事な要素にもなったと考えられる。

また、神道は日本の伝統として守るべきものという新渡戸の考えについて、彼は、神道は「日本独自のもの」であると主張している。さらに、「パーソナル・レリジオン」としてキリスト教に対して、神道は「共存的宗教」と名づけた。しかし、宗教といっても神道は「コミュニケーション・マジック」として、人間一人一人の「個人魂」までは染み込まないと述べている。新渡戸は、これを神道の弱点として指摘し、個人の魂の救済を求めるなら西洋の基盤であるキリスト教を学ばなければならない。また、神道には欠かさない存在である「天皇」について新渡戸は、天皇は「天の代表者」及び「国民統一創造者」として守るべき存在と強調している。

新渡戸稲造は、近代日本思想家の一人として、様々な分野で活躍した人物であるが、その時代背景も彼の思想の特色によく見られる。幼いころから自分の家の伝統を守らなければならぬという強い決心によって、彼は最後まで、家の伝統の誇りを守るほかに、生涯で最も強い影響を与えた明治天皇および皇室に対し、国家という新たな形に対して一生懸命に働きかけた。

本論文で考察したように、新渡戸稲造における神道観は、単色の思想に染めるだけではなく、多彩な色で彼の思想を染めてきた。幼いころに触れた神道・仏教・キリスト教という様々な信仰によって、青春時代に自分の大志を実現するためにキリスト教に身を任せ、晩年になり、多方面に渡る活躍を通じて、「人間誰しも自分の光であり」という普遍的な教義に到達することによって彼の円熟した思想が形成されたと考えられる。彼にとつて神道は単なる日本人の特有な遺産として守るべきものではなく、世界遺産として守るべきものとなったのである。

### 〈註〉

- (1) 岩瀬誠「新渡戸稲造の神道観について」『皇學館論叢』第二十九卷第三号、一九九六年
- (2) 佐藤・伯「新渡戸稲造における維新と伝統——日本論・神道論を手がかりに——」『明治聖徳記念学会紀要（復刊第四五号）』平成二〇年（二〇〇八年）十一月
- (3) 本書は、新渡戸稲造が国連盟事務局次長として一九二三年頃執筆されたものである。本書は原文（英文）のまま、一九三四年に丸善より出版された。『幼き日の思い出』新渡戸稲造全集第十九巻、七三頁
- (4) 英文原文「In our family very few religious rites were observed.

To use modern language, my grandfather was a materialist and my father a sceptic, while my mother - s faith, I believe, consisted in commemorating (not worshipping) ancestors. When other people had decorations and festivities on certain religious days, our family did not observe them — to my great chagrin.」(Reminiscences of Childhood, 一九三四年、全集第十五卷、五二八～五二九頁)

(5) 『幼き日の思い出』新渡戸稲造全集第十九卷、五九〇頁「はしがき」婦人メリー・P・E・ニトベが執筆した文書。新渡戸の姪は新渡戸稲造の年齢より三歳下。「神棚」の原文は family shrine である。

(6) 同上、六二九頁

(7) 『農業本論』、全集第二卷、一八九八年、九頁

(8) 大島正健、『クラーク先生とその弟子たち』、新地書房一九九一年、一三九頁(本書は一九三七年帝國教育會出版部の初版より改訂増補したものである。)

(9) 内村鑑三(著)鈴木俊郎(訳)How I Became a Christian (『余は如何にして基督信徒となりし乎』、岩波書店、一九三八年、六〇頁)

(10) 『帰雁の蘆』、全集第六卷、一九〇七年、一三三頁

(11) 同上、一三八頁

(12) 『宮部金吾宛書簡』全集、三卷、一五八頁(原文は英文)「I am attending a Quakers' Meeting every Sunday. I like very much their simplicity and earnestness.」(全集三卷、四二五頁)

(13) 「Japan and the Japanese 日本と日本人」Articles to the 'Friend' Review フレンド・レビュー、一八八六年二月十三日 John Collins による寄稿文(日本語訳：佐藤全弘)全集第三卷、一一頁、原文「There are three systems of religion in Japan: Buddhism, or the system of Gautama, popular among the lower classes; Shintoism, whose list of deities amounts to 8,000,000, and Confucianism, an ethical form, known but little in that country. The temples of their gods are imposing structures, the offerings of money, rice, cakes, &c., being numerous; but the Buddhist priest do not believe what they teach, and the houses of worship are at times thronged with buyers and sellers.」全集第三卷、二七頁

(14) 『日米関係史』、全集第十七卷、一八九一年、四八七頁

(15) 『農業本論』、全集第二卷、一八九八年、九頁

(16) 『武士道』、全集第一卷、一九〇〇年三六～三七頁

(17) 『武士道』の序文には新渡戸稲造は自分がキリスト教者であることを、日本文化及び思想を解明する祭、疑う必要ないと主張している。「キリスト教そのものに対する私の態度が疑はれることはない」と信ずる。「中略」私はキリストが教へ且つ新約聖書の中に伝えられて居る宗教、並に心に書かれたる律法を信ずる。」同上、二〇～二二頁

(18) 『日本国民』、全集第十七卷、一九二二年、一一四頁

(19) 『西洋の事情と思想』、全集第六卷、一九三四年、五九六頁

(20) 『日本』、全集第十八卷、一九三一年、三四〇頁

- (21) 同上、三三四頁
- (22) 『幼き日の思い出』、全集第十九卷、一九三四年、六三〇頁
- (23) 『西洋の事情と思想』、全集第六卷、一九三四年、六〇二頁
- (24) 『幼き日の思い出』、全集第十九卷、一九三四年、六三一頁
- (25) 同上、六三四頁
- (26) 同上、六四五、六四六頁
- (27) 同上、六四六頁